古都に息づく文化 伝統と革新

能楽シテ方金剛流宗家の金剛永謹氏と大蔵流狂言方の茂山七五三氏が2023年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。ともに京都で研鑽を積んできた。様々な伝統芸能・文化を育んできた京都のまちだが、その継承には課題もある。

文化庁京都移転から1年

文化庁が京都に移転してから1年。地元では、同庁との連携により、「文化首都（京都）の存在感を高めようとの機運が盛り上がっている。活動の中心は京都府・市と経済団体などで構成する「文化庁連携プラットフォーム」だ。2023年9月には食と音楽の意見交換や地域の行・催事などの視察・体験をする中で、国の政策立案にも寄与したいという。

文化庁には国立の文化財修理センターを京都に新設する構想がある。存続が危ぶまれる文化財・施設を修理して利活用し、観光に生かすことは「文化観光」の面からも重要だ。その考え方は地元自治体や経済団体も共有しており、25年の大阪・関西万博を情報発信の絶好の機会と捉えている。9つの府県が合同出展する関西パビリオン内の京都ブースで、京都の文化の魅力を映像や実演などでアピールし、来場者の京都への回遊を促す考えだ。

京都駅周辺を文化の集積地にとの構想も進む。23年10月に京都市立芸術大学が京都駅東部エリアに移転、京都市民が平日に利用できる図書館や、作品を鑑賞できるギャラリーを開設するなど、開かれた大学となっている。24年5月に移転記念「祝賀能」公演を開催するのをはじめ、イベントも目白押しだ。大学の隣接地に今後、京都信用金庫などが文化芸術活動の支援施設を建設する計画もある。

京都府庁に隣接する庁舎に移転した文化庁（京都市上京区）

観光客集中への対策が課題

京都を訪れる観光客が急回復し、オーバーツーリズム（観光公害）が再燃している。京都市観光協会がまとめた市内主要ホテルの2023年客室稼働率は73.4%と、新型コロナウイルス禍前の19年には及ばないものの、前年を20ポイント超上回った。円安傾向が続く24年も、インバウンド（訪日客）を中心に、観光客がさらに増えると予想される。

NHK大河ドラマ「光る君へ」の放映も、京都人気を後押しする。平安装束が見られる5月の葵祭や10月の時代祭は、例年以上に関心を集めると市観光協会は見ている。また、24年は「古都京都の文化財」が世界遺産に登録されてから30周年に当たる。世界遺産の一つである二条城の本丸御殿が修理を終え、9月に18年ぶりに公開されることも話題を呼びそうだ。

オーバーツーリズムへの対策は急務だ。清水寺や金閣寺などの人気スポットでは、観光客が集中し、市民がバスに乗れなくなるなどの問題が起きている。

京都市などは、「地域・時間・季節」の分散のほか、乗り物の混雑緩和のため、荷物を預けての「手ぶら観光」を呼び掛けている。リニューアルした京都駅地下の「クロスタ京都」などの預かりサービスの利用も進む。また、市は市バスの1日乗車券を廃止し、地下鉄・バス1日券の利用を促して乗客の分散を図っている。観光地の混雑状況を予測する「京都観光快適度マップ」をネットで確認するなど、データの活用も進めたい。

観光名所・産寧坂（三年坂）は平日でもこの混雑（京都市東山区）

大蔵流狂言方

茂山 七五三氏

1947年、大蔵流狂言方の四世茂山千作の次男として生まれる。51年に狂言「茶平餅」の子方で初舞台。76年、兄の五世千作、従兄弟のあきらとともに「花形狂言会」を発足。95年二世七五三襲名。2011年京都市文化功労者表彰、20年芸術選奨文部科学大臣賞受賞、23年人間国宝認定。

気取らず楽しむ「お豆腐狂言」

――人間国宝の認定を受けて、変わったことはありますか。

無様な舞台はできません。過去にやった狂言は、自分なりにその曲を見直す気持ちで勤めています。主人公（シテ）を演じることが増えたので、兄や父がどう演じていたのかもよく考えます。

――茂山千五郎家は江戸時代から京都が拠点です。

京都の町衆に育てられたことが、家の芸風に影響していると思います。茂山家の家訓は「お豆腐狂言」といって、頼まれればどこへでも出向いて狂言を楽しんでもらうことをモットーにしています。父や祖父からは、「四角いお豆腐の形を崩してはいけない」と教えられました。基本がちゃんとしていれば、好きなように味付けしていいと、気取らず、笑ってもらえるのが一番です。

――若いころはサラリーマンの二足のわらじをはいたそうですね。

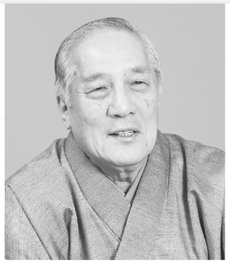
当時は狂言師だけでは生活できなかったのです。父が小中学校に出向く学校狂言を始めたり、京都市の「市民狂言会」が始まったりして、狂言のお客さんが増えていきました。狂言に専念できるようになったのは40歳のときです。

――後継者は育っていますか。

孫世代に5人の男子がおりますが、狂言は好きなようで、厳しい稽古にもついてきます。息子世代にも狂言師が5人いるので、あと100年は大丈夫でしょう。一般家庭から入った狂言師もいます。狂言の家に生まれた人でなくても、やってくれるのなら歓迎ですが、生計を立てるのは厳しいですが、狂言のすそ野を広げるため、いろいろな役者が必要です。

――今後の課題は何でしょう。

京都にいても能や狂言を知らない人がいるので、そういう人たちに広く知ってもらいたいですね。京都でしか見られないような企画もいいと思います。素人の発表会など無料の公演もありますから、一度能楽堂に足を運んでほしいと思います。



能楽シテ方金剛流宗家

金剛 永謹氏

1951年、能楽金剛流宗家の二世金剛巌の長男として京都市に生まれる。56年に能「猩々」で初舞台、58年に初シテを勤める。98年に金剛流宗家を継承。2010年京都市文化功労者表彰、18年紫綬褒章受章、23年恩賜賞・日本芸術院賞受賞、人間国宝認定、仏芸術文化勲章オフィシエ受章。

京都で育まれた豪快かつ優美な芸

――シテ方5流のうち、金剛流の宗家だけが京都を本拠地としています。

昭和初期までは東京に宗家があったのですが、断絶したため、1937年から京都の当流が宗家になりました。金剛流の芸風は豪快な動きの中に華麗さや優美さがあるといわれますが、京都のまちで育まれた影響かもしれません。能が幕府の式楽となった江戸と違って、京都では町人たちが能を見てきた歴史があり、日ごろから能に親しむ人が多い。能楽を支えてくれる人の層が厚いと感じます。茶の湯や華道など、ほかの伝統文化と交流しやすいのも利点です。

――文化庁が京都に移転しました。

人間国宝の認定式が京都で行われるなど、東京・極集中に変化が見られます。これを機に、関西の文化活動が活発になればと期待しています。

――宗家として、伝統を次世代につなげていくことも大切です。

孫が4人おりますが、みな初舞台を踏んで能の修行を始めています。幼いうちは遊びの延長で、日常生活の中に能があるということに慣れさせることから始めます。私自身も4歳から稽古を始め、物心ついたときには能をすることが当たり前になっていました。孫たちも楽しんで稽古しているようです。

私たちのように代々能を職業としている人ばかりでなく、一般家庭から能の世界に入ってくる人も大切です。現在当家で修業している書生2人は、大学の能楽部出身。ただ、シテ方は比較的多いのですが、ワキ方や狂言方、囃子方は不足しており、業界全体での育成が課題です。

――欧米でも能への関心は高いようですが、京都を訪れる外国人観光客はどうですか。

ホテルのコンシェルジュを通して能を見に来るような外国人はまだ少数です。チケットの入手方法など、慣れない人にはアクセスしにくいのかもしれません。公演数を増やすことは難しいですが、工夫できる分野はいろいろあると思います。

老舗が挑む、新しい和菓子

だるまをかたどった「といろ」の菓子

そぼろ状のこしあんで小倉あんを巻き込んだ和菓子「雲龍」で知られる俵屋吉富（1755年創業の老舗和菓子店のもう一つの顔が、「といろby Tawaraya Yoshitomi」だ。若手女性職人の提案から生まれた菓子は、ピンクやイエロー、グリーンなどカラフルな色どりが目を引く。店名にもなった「都色（といろ）～京だるまぁ～」は干菓子の木型を用いたラムネ風の菓子で、コロンとした形がかわいらしい。「SUETOMI AOQ（青久）」はあんことフィナンシェなど、和と洋を掛け合わせた新感覚の菓子を提案する。手掛けるのは1893年創業の末富だ。2023年5月に開業した カフェスタンドでは、こしあん入りの「あんカフェオレ」などのドリンクも提供している。ほかにも、聖護院八ツ橋総本店が手掛ける「nikinik」は花や動物をかたどったパステルカラーの生八ツ橋、亀谷良長はトーストに載せて食べる「スライスようかん」を売り出すなど、老舗和菓子店による新しい試みが京都の各地で生まれている。

贈答需要の減少や少子高齢化などで、和菓子市場は縮小傾向にある。俵屋吉富は「といろ」では観光客や若者層など、今までと違う顧客にアプローチできていると話す。今年発売で100周年の雲龍も、発売当時は和菓子という形が画期的だと評判を呼んだ。伝統を守りながらも、新たな取り組みで顧客を開拓し、京都の和菓子文化は続いてゆく。

伝統を次世代につなぐ

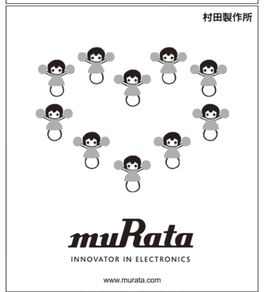
室町時代に京都で成した能楽。人間国宝の金剛永謹氏や茂山七五三氏をはじめ、多くの能楽師が京都で活動しているが、後継者不足は伝統芸能にも影を落とす。京都の能楽界で次世代の育成に大きな役割を果たしているのが京都能楽養成会だ。

能楽師の生徒、ワキ方、狂言方、囃子方が合同で若手を養成する組織で、現在25人が研修に励んでいる。能楽師の子女が中心だが、大学の能楽部などを経て入会する人も。それぞれの専門に加え、シテ方が笛や大鼓を習うなど、希望すればほかの職種の稽古も無料で受けられる。

能楽師は代々続く家が多いとはいえ、子どもが必ずしも能楽師になるとは限らない。養成会の講師を務める片山九郎右衛門さんは「同世代の仲間がいることが大切だ」と話す。長く厳しい修行に くじけそうになっても、年の近い仲間に悩みを相談するなどして乗り越えられるという。

伝統的な祭りでも、担い手不足は課題だ。京都三大祭りの1つ、葵祭では下鴨神社青年会が運営の一翼を担っている。発足したのは20年前だ。それまでは神社の周辺に居住する氏子が諸行事の運営を担っていたが、少子高齢化などで人材が不足、居住地にかかわらず広く参加できるようにした。

会員の紹介などを通じ、現在は100人ほどが名を連ねる。平安装束に身を包んで葵祭の行列に参加するほか、御阪祭や流鏑馬神事、御手洗祭など神社の年中行事の奉仕活動をしている。

片山九郎右衛門さんの稽古を受ける京都能楽養成会の若手ら

企画・制作＝日本経済新聞社Nブランドスタジオ